

氏名	華 雪 梅		
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）		
学位記番号	博甲第249号		
学位授与の日付	2019年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文の題目	徐福伝説の民俗文化研究 ―日本における徐福伝説を中心として―		
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授 小 熊 誠
	副査	神奈川大学	教授 佐 野 賢 治
	副査	神奈川大学	教授 前 田 禎 彦
	副査	国立歴史民俗博物館	名誉教授 常 光 徹

【論文内容の要旨】

本論文は、日本における徐福伝説を検証して、民俗文化を研究するものである。日本における徐福伝説を中心に、それに関する民俗文化の展開と役割を考察した。本論文では、まず文献資料から徐福伝説の歴史上における変遷を捉えた。次に日本における徐福伝説ゆかりの地において行った実地調査を基に、徐福伝説とそこから生じた祭祀活動や民俗文化などを探った。こうした民俗学的視点から、徐福伝説と日本人の日常生活との結びつきを考察した。

本論文は、序章と終章を含め全7章からなる。各章については以下の通りである。

序章 問題提起

- 第1節 問題提起
- 第2節 研究目的
- 第3節 先行研究と本論文の視点
- 第4節 調査地域と研究方法
- 第5節 論文校正

第1章 文献から見る徐福伝説

- はじめに
- 第1節 『史記』に登場した徐福
- 第2節 史料から見る徐福東渡伝説の変容
- おわりに

第2章 東アジアにおける徐福伝説の現在

- はじめに
- 第1節 中国の徐福伝説
- 第2節 韓国の徐福伝説
- 第3節 日本の徐福伝説
- おわりに

第3章 青森県中泊町の徐福伝説に関する民俗文化

はじめに

第1節 調査地概要

第2節 青森県中泊町の徐福ゆかりの地とその伝説

第3節 「中泊徐福まつり」の構造

第4節 中泊町の徐福伝説に関する民俗文化

おわりに

第4章 和歌山県新宮市の徐福伝説に関する民俗文化

はじめに

第1節 調査地概要

第2節 徐福公園にある徐福伝説を語る事物

第3節 徐福伝説と熊野信仰との関連

第4節 新宮市の徐福顕彰活動の形成と変遷

第5節 「熊野徐福万燈祭」の構造

第6節 新宮市の徐福伝説に関する民俗文化

おわりに

第5章 佐賀県佐賀市の徐福伝説に関する民俗文化

はじめに

第1節 佐賀市徐福伝説の概要

第2節 佐賀市の徐福ゆかりの地とその伝説

第3節 1980年金立神社例大祭の構造

第4節 佐賀市の徐福伝説に関する民俗文化

おわりに

終章

第1節 日本の徐福伝説

第2節 徐福伝説地の特徴

第3節 徐福伝説の時代における特徴

第4節 徐福伝説の現代的役割

第5節 今後の課題

参考文献

日本の徐福伝説は、徐福東渡という歴史上の事件から生み出された伝説である。日本では、徐福が立ち寄ったとされる伝説ゆかりの地が、全国で20数か所以上ある。本論文では日本全国の徐福ゆかりの地、20数か所の中から、地域性・共通性・異質性を考慮し、青森県中泊町・和歌山県新宮市・佐賀県佐賀市という三つの地域を選定した。それぞれの地域における徐福伝説のあり方を考察し、徐福伝説が地元に着した理由と背景を検討した。また徐福伝説に関する祭祀活動の開催と民俗文化の創造を分析し、徐福伝説の伝承方法とその現代的活用を明らかにした。

今まで日本の徐福伝説に関する研究の多くは、各地域の伝説の単なる紹介にとどまる傾向にあった。また、地域間のつながりや伝説の奥底にある人々の考え方も十分には考慮されていない。伝説の源は歴史にある。そのため、中国の歴史書に登場した徐福のことは、さらに検討されなければならない。だが、歴史的な視点から進める徐福研究の余地は少ない。本論文では民俗学の視点から日本にある徐福伝説のあり方を研究した。

本論文ではこのような歴史的背景における徐福伝説の発生・伝播・変化・伝承に注目し、歴史文献の記述を抜き出して分析を加えた。また、民間伝承として伝えられている徐福伝説の実地調査を行い、日本の徐福伝説とそれに関連する民俗文化を明らかにした。2200 年程前に日本に上陸したと言われる中国人の徐福は、どのように日本人に受け入れられたのか。徐福に対する祭祀活動や関連する民俗文化の創造などの目的と役割にも考察を加え、徐福伝説の伝承地における人々の心意を解明した。さらに、本論文で選定した三つの徐福伝承地の特徴を検討し、徐福伝説が地元に着した理由と背景を考察した。最後に、2000 年以上にわたり現在でも語り継がれている徐福伝説の時代的特徴を考察し、その現代的役割を明らかにした。

本論文は、序章と終章を含め全 7 章からなる。

序章では、先行研究とその問題点を考察し、本論文の研究方法を提示した。中国の歴史書に登場した徐福に関する先行研究を考察すると、歴史的な視点から進める徐福研究の余地は少ない。そこで、本論文では民俗学的視点から日本の徐福伝説のあり方を研究した。まず文献資料から徐福伝説の歴史上における変遷を捉え、次に日本における徐福伝説ゆかりの地において行った実地調査を基に、徐福伝説とそこから生じた祭祀活動や民俗文化などを探った。

第 1 章では歴史的アプローチから徐福伝説の歴史的変遷を中国・韓国・日本の文献資料を通して整理した。本章では、文献記録の変化から、徐福東渡伝説の発生と変容を明らかにした。徐福東渡の実像を探るため、中国の歴史に登場した徐福の分析から始めた。まず、一次資料の『史記』の記録を分析した。さらに、『史記』から派生した歴史文献や漢詩や筆談資料などの文献を整理し、徐福東渡伝説の変容を検討した。これらの作業により、東アジアにおける時代環境の変化に伴い、徐福伝説がどのように変化したのか、歴史上でどのように利用されたのかを明らかにした。

第 2 章では、東アジアの徐福伝説の全体像を述べた。徐福の出身は中国であるが、韓国や日本でも古くから徐福伝説の伝承地が多くある。最初に、中国の徐福伝説について、「徐福の故郷」・「徐福集団の出港地」など、幾つかの論争を検討した。そして徐福関連事物の建造をはじめ、徐福研究組織を整理することによって、徐福伝説の現代的意義を提示した。次に、韓国の済州島における徐福伝説を対象として考察を行った。徐福公園などの事物の建立背景などを検討し、徐福伝説の現況を捉えた。三番目に、日本の徐福伝説について、地図や図表などを通じて広く分布している状況を把握し、伝承地間の関係を検討した。最後に、東アジアを代表する中国・韓国・日本の徐福伝説に着目し、国際的な視点で徐福伝説の現在を捉えた。

第 3 章から第 5 章では、民俗学的アプローチから三つの調査地の実地調査を行い、徐福伝説の実態を考察した。

第 3 章は本州最北端に位置する青森県中泊町旧小泊村を調査地とし、当該地域の徐福伝説をまとめたものである。小泊村に語り継がれている徐福伝説をめぐって、昔から伝えられてきた徐福伝説の由緒とその内容を整理し、漁民の航海信仰を検討した。また、地元の徐福伝説に由来する「中泊徐福まつり」の構造を考察し、地元の徐福伝説に関する民俗文化を検討した。「中泊徐福まつり」は単に徐福伝説を語る活動ではない。地元の郷土芸能が祭りの場で上演され、徐福伝説と融合した多様な舞踊が行われることが重要である。徐福伝説は地元で村おこしに利用され、地域振興の文化要素として活用されている。

第 4 章では、和歌山県新宮市に伝えられている徐福伝説を踏まえ、地元の徐福伝説を伝承する実態とその背景を明らかにした。古い歴史を持っている和歌山県新宮市の徐福伝説を手がかりとして、地元での徐福伝説から展開した徐福顕彰活動の状況を考察した。事例として 2019 年時点までに 56 回の開催を数える「熊野徐福万燈祭」を取り上げた。徐福伝説に関連する民俗文化は、新宮市の地

域振興に利用されているだけでなく、徐福伝承地としての特徴をも示している。徐福関連商品の開発は、観光の振興に役立っている。そして、その開発を通して、伝統文化を発掘しようとする地元の人々の強い意欲が形成されている。

第5章は佐賀県佐賀市の徐福伝説にまつわる事物の調査や、地元の人々に対する聞き取り調査を基に分析した。事例として、1980年に開催された金立神社例大祭を取り上げた。金立神社例大祭は、祭りという形で地元の人々の徐福に対する記憶（特別な感動）を呼び戻す。往古から伝えられてきた行事の開催は、金立大権現としての徐福に対する敬意の表現だけでなく、先祖たちから伝えられてきた信仰伝承の現れである。歴史文献の分析や実地調査を基に、徐福伝説の伝承形式と、それに端を発した民俗文化の実態を明らかにした。

終章では、「いま」の視点だけではなく、時間軸と空間軸を移行させて徐福伝説の発生・伝播・変化・伝承を考察した。本論文で調査地として選定した三つの徐福伝承地の特徴を整理した。その結果、この3地域の徐福に関連する事物の建造と民俗文化の創造に注目すると、それぞれの特徴がみられた。さらに、東アジアにおける徐福伝説の古代・中古・中世・近世・現代において、それぞれの徐福伝説の時代における特徴を考察した。

【論文審査の結果の要旨】

華雪梅氏の博士論文の審査に関しては、上記4名の審査委員によって行われた。

まず、第1章の「文献から見る徐福伝説」に関して、さまざまな文献で書かれる徐福伝説をまとめている。とくに、10世紀に奈良興福寺の寛輔が中国五台山巡礼に行き、齊州開山寺の義楚に出会って日本の風土と伝説を語ると、義楚は『義楚六帖』を書いて、徐福伝承・金峯寺・富士山を書き、日本の徐福渡来説の始まりとした点は、それ以降日本の徐福伝説に深い影響を与えた。この点の指摘は、従来あまり知られておらず、興味深い。また、江戸時代における朝鮮通信使と日本の儒学者との筆談資料を利用して、徐福が逸書を日本に持って行ったかなど徐福に関する情報交換が行われていた点などを明らかにしたことは、筆談資料という文献を用いた新しい研究視点であると評価された。

第2章の「東アジアにおける徐福伝説の現在」に関しては、徐福について多角的に検討する指標として重要である。中国では日本と違って、徐福を送り出した伝説が各地で語られている。近年、江蘇省連雲港市の徐阜という村がかつて徐福村と呼ばれていた伝説が取り上げられ、中国でもメディアなどで紹介されている。著者は、この連雲港市に調査に出かけて、そこでの資料を収集し、徐福街道の写真や現地の徐福研究者と交流している。また、著者は徐福の出港地と言われる山東省青島市の琅琊港周囲も調査を行っている。さらに、韓国における徐福に関する伝承について、文献を通じて徐福一行の移動ルートに関するいくつかの解釈をまとめている。本論文は日本における徐福伝説の研究が主となるが、中国および韓国における徐福伝説を調べたことは、東アジア的視点で徐福伝説を研究することになり、この点は徐福研究上新たな視点として高く評価できる。

日本における徐福伝承地が20か所以上あるうち、本論は青森県中泊町、和歌山県新宮市、佐賀県佐賀市で調査を行っている。その3地域での共通点もあるが、むしろ各地における特色を本論では表現している。第3章の青森県中泊町では、徐福を神体としてまつる尾崎神社で、漁民に信仰されてきた。同時に山の信仰である修験道とも尾崎神社は関連する。この点は、それぞれの地域での歴史や信仰と関連するもので、他地域との比較が可能である。さらに、近年中泊町に造成された徐

福の里公園に徐福石像が建てられている。この徐福石像は、青森のねぶたを製作する竹浪氏の製作である。この徐福と青森のねぶたの関係は、さらに展開して2003年から「中泊徐福まつり」が行われるようになった。著者は、この祭りの調査を行っており、徐福と村おこしの関係性について検討したことは、現代における徐福伝説と民俗に関して指摘し、現代における民俗文化研究として評価できる。

第4章の和歌山県新宮市における徐福伝説および徐福に関わる事物は豊富であり、興味深い調査地である。新宮市の徐福に関する歴史と伝承は、他地域とは異なり、その歴史性が深くある。その一つの理由は、熊野信仰と徐福の結びつきがあることだと考えられる。熊野三山信仰は、この地域に普及しており、またこの地域は常世郷と結びついている。常世は、海の彼方に祖霊が集まる世界であり、そこは宝物があり、不老不死の世界である。中国東方海上の楽土である蓬莱島とそのイメージが重複する。熊野信仰は、山岳信仰であり、さらに常世思想を通して徐福と関連する複合的な信仰である。この徐福伝説と熊野信仰の関連を調査した点は、民俗学の視点からの調査として高く評価できる。さらに、新宮市の熊野徐福万燈祭および徐福公園における徐福関連の商品開発など、現代における地域振興と徐福伝説との関連性も調査しており、新宮市における多角的な民俗研究として評価される。

第5章では、佐賀県佐賀市における徐福伝説を調査した。徐福の伝説は、神社と関連する。佐賀市にある脊振山の麓に金立神社がある。そこにまつられている金立大権現が、徐福だと言われている。これは、神社の縁起として記されているだけでなく、地元の人びとからも「徐福さん」と呼ばれている。佐賀では、中国から農耕が伝えられた場所として考えられており、そのことと徐福の伝来が結びつて、徐福は農耕の神としてもまつられている。そこに、地域性が語られるが、さらにこの地域では徐福と地元の娘の悲恋が語られている。お辰という地元の娘が、ここに立ち寄った徐福と恋愛関係になったが、仙薬を探す徐福とは再会することがなく亡くなったので、お辰観音としてまつられている。徐福が50年後に戻ると言った故事に合わせて、この二人のために、50年に一度金立神社で例大祭が行われる。前回は1980年に行われ、その記録を本論では整理している。この地元の伝承と徐福の関係は、現在における地元の人びとが徐福をどのように考えているかに関わるたいへん重要な事象で、共同体におけるつながりとこの徐福とお辰の例大祭の関連を民俗学的に多様な徐福の伝承をまとめた点は、評価できる。

日本における徐福伝説に関連して、本論文では3か所での伝承を細かく調査し、それを検証した。徐福は、2000年以上も前に中国から伝来した人物とされているが、地域の人びとによる伝承はその地域の歴史と関わる記憶であり、地域の人びとのアイデンティティと関わる点を指摘した。とくに、民俗研究と関わる点では、熊野信仰あるいは神社信仰と徐福が関連している点を分析しており、さらなる研究が期待できる。さらに、現代における町おこし・村おこしと関連して、近年徐福の祭りが各地で行われている。地域の人びとにとってなぜ中国人の徐福が地域おこしにつながるのかについて、近年の日本における外国人の増加や人びとの国際的な感覚と関連させることも可能だと思われる。さらに、著者は中国人であり、日本人が日本の徐福伝説を調査する視点とは若干異なり、中国人が日本の徐福伝説を研究することによって東アジア的に多角的な視点で徐福伝説を検討している点も本論文の特徴として評価できる。今後、国際的な視点で東アジアにおける徐福伝説をさらに進展させることを期待する。

以上、本論文は神奈川大学歴史民俗資料学研究科における博士論文として大きな成果を上げ、高度な水準に達していると評価できる。本論の審査結果に基づき、華雪梅氏に博士(歴史民俗資料学)の学位を授与することがふさわしいものと審査員一同これを認める。